

沖縄文化の基底と普遍性：東南アジアとの対比において(共通論題(二)沖縄からアジアへ、そして世界へ,東京大会「世界のなかの沖縄」)

著者	アラム バクティアル
雑誌名	沖縄文化研究
巻	25
ページ	217-231
発行年	1999-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015856

沖縄文化の基底と普遍性

—東南アジアとの対比において—

バクティアル・アラム

私は現在、インドネシア大学の日本研究センターというところにおります。沖縄とのかかわりは、一九八七年からアメリカのハーバード大学の大学院（人類学）に留学し、博士論文作成のために一九九一年から沖縄本島の北部、国頭村の奥間で九三年八月まで一年四ヵ月、調査をしたことに始まり、調査を終えてアメリカに戻り、博士論文を提出して、九五年の一月にインドネシアに戻り、それ以来インドネシア大学で教えています。

1 文化とは何か

今回のシンポジウムにおいて、私に与えられたテーマは『沖縄文化の基底と普遍性』ですが、私は「文化」という概念を中心に発展した人類学という観点からこの問題について考えてみたいと思います。



す。

「文化」と言う言葉は、われわれが日常何気なしに使っている言葉の一つですが、一歩突っ込んでその意味を考えてみると、その意味が極めてあいまいなことに気付きます。

たとえば、沖縄文化の個性性については、沖縄が一九世紀後半まで少なくとも形式的には独立した琉球王国という国家を形成していたため、他の日本の地域と比べて極めて独特な宗教、言語、慣習などをもつ「沖縄文化」を發展させたと言われております。

そのため、沖縄の方言ウチナーグチでは、沖縄を「ウチナー」と称し、「ヤマトウー」つまり「日本」と区別しています。したがって、沖縄語はウチナーグチ、沖縄の人はウチナーンチュ、また、日本語はヤマトウーグチ、日本人はヤマトウンチュ、と言うように日本国内でいわゆる「日本人」・「和人」と自分たちを区別する民俗概念を持つ数少ない例といえます。

しかしながら、このような自らの文化の特徴を認める沖縄文化でさえ、何をもってして「沖縄的」とするのかを考えてみると、極めてあいまいです。一般的には、そのような沖縄的なものとして、「沖縄のやさしさ」、「イチヨレバチョーレー」（「出会えば兄弟」と言う意味の沖縄の格言）、さらには「守礼の国」（しゅれいのくに…常に礼儀を重んずる国）などのいわゆる沖縄的イデオロムがあげられますが、もう一歩踏み込んでそれらの価値観について考えてみると、それらが極めて普遍的なもので、

ほとんどの社会でも重要視されているものであることに気がきます。

そこで、沖縄文化とは何か、また「沖縄文化」といったアイデンティティーは存在するのか、という疑問に突き当たるわけです。人類学という「学問」の歴史は、ある意味ではこういった疑問に答えることを目的とした知的作業の軌跡であったと言えます。

現代の人類学では、文化を「人々が生を解釈し、行動を起こすための象徴もしくは意味の体系」(Geertz 1973)と理解しながらも、そのような体系が、常に当事者たちの権力や利害を反映した行為に影響され変化するという点が重要視されています。したがって、一つの文化にあたかも一定不変の本質(エッセンス)があるとし、それからはみ出した文化現象を異端や逸脱とする考え方を、人類学では、文化の動態性を見失った「エッセンシャルイズム」(本質主義)と批判しています。

このような動態的文化観からすると、いま私たちが、「沖縄らしさ」とか沖縄文化の「基底」と理解している舞踊、芸術、衣装、概念や発想なども、常に過去のある歴史的契機の中で構築されたものであり、異なる歴史的契機のもとでまた新たに再生産される可能性もあることが分かります。

たとえば、明治以来日本の女性の理想像とされた「良妻賢母」という概念は、あたかもそれが大昔から日本に存在し、大和撫子(ヤマトナデシコ)のような日本固有の女性の理想像だと思われがちです。しかし、最近の研究が明かしていることは、実際それは明治中期に欧米の啓蒙主義に触発されて「発明」されたということです。ただ、ひとたびそのような概念が工業化を進めるための男性労働力

の確保や専業主婦の必要性といった明治中期の歴史的契機と連動されるや、あたかもそれが日本古代からあった固有の概念と思われるようになったわけです (Tamanoi 1990)。

これに類する現象は、他の文化でも数限りなく見られます。たとえば、ジャワ文化を代表する民族芸能とされる影絵「ワヤン」(wayang)は、その美的側面以外に極めて哲学的な側面を持っていることで知られています。しかし、最近の研究 (Sears 1996) が明かしていることは、今世紀初頭ヨーロッパで大ブームを沸き起こした神智学 (theosophy) (注：直観によって神に触れようとする信仰体系およびその運動) がオランダ人たちによってインドネシアにもたらされ、それがジャワの影絵に思弁哲学的影響を与えたと言うことです。

このような歴史的ダイナミズムに基づく文化観を、私は、「プロセスとしての文化」または「動態的文化観」と呼んでいます (Alam 1995 a, 1995 b, 1998)。そのような視点をもたらす斬新な発見は、「良妻賢母」的女性観や思弁的人生観など日本やジャワ文化の代表的特徴をなしていると思われるがちな文化的傾向が、実はある時期に、歴史的に、一定の利害と権力のもとに作り上げられたものであると言うことです。

そこで、次にかかる視点がいかに沖縄文化の理解——特に東南アジア、インドネシアとの対比において——に役立つのかを考察してみたいと思います。

2 文化の歴史性

まず「プロセスとしての文化」といった視点から沖縄を見た場合に、東南アジアとの比較が役立つのは、東南アジア諸民族の植民地体験ならびに民族国家への統合と、近代沖縄がたどった歴史の共通性といえます。

植民地体験や新たな民族国家への統合という歴史的過程は、他文化との共存、妥協、従属などを余儀なくされたため、文化構築のプロセスにおける他文化との関係がより鮮明に現れます。

たとえば、上述したようにジャワの影絵ワヤンの例の他にも、最近の人類学調査は、バリ文化の代表的民族芸能とされるケチャック・ダンス（男たちが輪になってサルを演じるダンス）や独特な繊細な手法で有名なバリ絵画などが、実は一九二〇—三〇年代にバリに魅せられて住み着いた欧米の芸術家の創作活動の成果だということを実証しています。

つまりこれらの人類学的発見が明らかにしたことは、現在われわれがジャワ文化やバリ文化と感じているものの多くが、過去において、これらの社会が西洋の巨大な権力と出会い、それに取り込まれていった過程で構築されたものだということです。

ただし、もちろん今日のジャワやバリでこれらの文化的要素が外国から来たものだと思う人はほとんどいません。なぜなら、これは、バリ文化やジャワ文化が決してオリジナリティーに欠けると言うことではなく、全ての文化が基本的にはこのような歴史的プロセスによって構築されながらも、そ

れが当事者たちのアイデンティティーの一部となるや、あたかもはるか昔から存在した固有のものであるかのように認識されるからです。

そこで今度は沖縄に目を転じてみると、色々な面でこのような文化の歴史性とダイナミズムが見られることに気づきます。

沖縄の歴史の中には東南アジアの植民地体験に近いプロセスがあります。沖縄は過去には独立した琉球王国でしたが、十七世紀に薩摩の属国になり、明治維新後日本に統合され、それに続く方言規制などの日本化への一連の動きがありました。そして、そのようなプロセスの中で現在我々が知っているような沖縄文化が構築されたことは明らかです。

たとえば、周知のように、十七世紀初頭の薩摩の琉球侵略以後、薩摩は、当時の鎖国体制の中で中国との貿易の利益を確保するためには、琉球が属国になったことを中国の朝廷に隠さなければなりませんでした。そのため、冊封使が来沖中は、日本的な衣装・髪型、年号、歌、言葉、書物などをすべて禁じ、いわゆる日本とは異なる琉球的なもののみを認めたのです。日本と異なる異文化としての沖縄の構築は、こうして外部の支配者薩摩が推し進めたわけです。

また、これもよく知られていることですが、薩摩の琉球支配が続いた江戸時代を通じて、薩摩は琉球国に対し将軍即位の際などに江戸に慶賀使を送ることを義務づけ、それが琉球国の「江戸上り」として知られるようになりました。そうした江戸上りでも、薩摩が幕府や諸藩に対し「異国」沖縄を支

配する島津氏の権威を印象づけるため、できるだけ中国の風俗をまねて異国情緒を出すようにさせられたわけです。そのため、使者一行は中国服を着せられ、役名も中国式にさせられたことはよく知られています。ここにも、日本と異なる琉球・沖縄というアイデンティティーの定義付けに外部の権力の介入があつたことが明らかです。

ちなみに、バリやジャワでも、植民地支配者オランダは、イスラムがインドネシアに移入される前に栄えたヒンズー・仏教文化を「真実」のインドネシア文化と見なし、そのような過去の偉大な文明の保護者となることによりみずからの植民地支配を正当化しました。また、事実、植民地時代に復活もしくは再発見された過去のヒンズー・仏教文化の遺跡や風習もたくさんあります。

3 沖縄姓名の変遷

さて、このような「異文化」としての沖縄文化構築の一例として、沖縄の人々の名字・姓の変遷が挙げられます (Higa 1964)。まず、琉球侵略後、薩摩は、先ほど述べた文化政策の一環として日本的な沖縄の名前表記を「異国風」のものに変えました。たとえば、次のようなものです。

船越⇓富名腰 (Funakushi)

真坂名⇓真境名 (Mazakana)

徳川⇓渡久川 (Tukugaa)

下田⇓志茂田 (Shimuta)

前里⇓真栄里 (Meezatu)

内泊⇓宇地泊 (Uchidumai)

これらの漢字表記の変換は先述した中国に対する外交政策の一環でしたが、その過程で今私たちが沖縄的と感じる表記が制度化したわけです。ところが、明治政府の琉球処分以後、沖縄県が民族国家日本に統合されるや、沖縄県人の姓が他県の人たちに馴染まないという問題が生じました。比嘉春潮によれば、このような問題は特に本土や海外に移住した沖縄県人が直面し、他県人にとって沖縄の名字が奇異にうつるため、彼らが不当な差別を受けたと報告しています。しかし、当時の戸籍法では名字を変えることが許されなかったため、そうした差別を避けるには、沖縄の名字の漢字表記は変えずに読み方だけを日本的なものにしました。その例は以下のようなものです。

宮城 Miyagusuku ⇓ Miyagi

金城 Kanagusuku ⇓ Kinjou

比屋根 Hiyagon ⇓ Hiwane

新屋敷 Mii-yashiki ⇓ Shin-yashiki

島袋 Shimabuku ⇓ Shimabukuro

西平 Nishinda ⇓ Nishihira

さらに、大正時代になり、沖縄の教育者・歴史家、島袋源一郎は、県外へ移住した人だけでなく

べての沖縄県民が日本的な姓を変えることを提唱しました。特に、彼が強調したのは、薩摩の琉球支配以後異国風に変えられた沖縄の名字の漢字表記をもとに戻すということでした。すでに述べたように、姓の漢字を変えるということは、当時の戸籍法では許されなかったので、漢字表記をもとに戻すことは姓の改変ではなく本来の表記の復活だと島袋は論じました。

県内外の沖縄知識人は島袋の意見に共鳴し、かつて薩摩によって行われた沖縄姓の漢字表記改変の撤回以外に、以下の表記改正を行いました。

渡久山 (Tokuyama) ↓ 徳山

豊見山 (Tomiyama) ↓ 富山

賀根村 (Kanemura) ↓ 兼村

伊渡山 (Itoyama) ↓ 糸山

興古田 (Yokota) ↓ 横田

慶世村 (Kiyomura) ↓ 清村

仲村渠 (Nakandakari) ↓ 仲村柄 (Nakankari) ↓ 中村 (Nakamura)

こうした流れを受けて、一九三六年には沖縄県教育会が「姓の呼称改正に関する審査委員会」を設置し、姓の呼称改正の基準作成を開始しました。さらに、沖縄の歴史家・真境名安興は、沖縄の姓はもともと日本の姓に近かったが、薩摩の外交政策によって「異国的」なものに変えられてしまったと

いう議論を発表しました。そして翌年、一九三七年には、「姓の呼称改正に関する審査委員会」による姓の呼称改正の基準が完成し、八四の姓の呼称・読み方の改正が示されました。

しかし、最終的には戦前の戸籍法の枠組みでは、姓の漢字表記を変えるにはいたらず、読み方の改正にとどまりました。にもかかわらず、戦争により沖縄の戸籍記録の多くが焼失したため、戦後の新たな戸籍作成において、新しい姓が本人の自由意志によって決めることができるようになった訳です。

4 東南アジアとの比較

さて、このように沖縄の姓の変遷を見ると、そこにはいかなるものが「沖縄的」もしくは「日本的」なのかという考え方が、常にある特殊な歴史的契機のもとで、また権力との密接なつながりのもとで作られ出されたきたということです。たとえば、薩摩の琉球入り直後には、薩摩の支配者たちは、日本の姓とほぼ同じ響きを持つものでも、漢字表記を変えることにより琉球的なイメージを作り出そうと考えました。

しかし明治維新以後、沖縄の知識人たちは、そのような歴史的過程で作られ出された沖縄の姓が過去の政治的権力により故意に「異国化」されたものだと考え、むしろ本来の沖縄の姓は日本のそれに近いものだと主張しました。戦後になり、沖縄県の戸籍資料が焼失したこともあり、はじめて自由意志で姓を決める選択肢が現れたわけですが、その結果現在の沖縄の人々の姓の漢字表記は他県と異な

るケースが多いようですが、読み方はほぼ「日本的」といえます。

このように歴史的にある文化のアイデンティティーや特質について現れる発想や議論を人類学では「言説」(discourse)と称していますが、沖縄の姓の変遷は明らかにそのような言説が権力と密接に結びついたかたちで歴史的に発展したことを示しています。

文化的言説の歴史的推移についてはこの文化でも見られることですが、東南アジアとの対比において目立つのは、すでに述べたように、東南アジア諸民族の植民地体験ならびに民族国家への統合と、近代沖縄がたどった歴史の共通性です。

インドネシアを例に取れば、沖縄の姓の変遷のようなケースはインドネシアの華人が体験した歴史的プロセスです。オランダによる植民地時代、インドネシアの華人は、居住地、教育、服装などの点で、他のインドネシア人(いわゆる「現地人」)から分離されました。特に文化面においては、華人は弁髪と中国服の着用を十九世紀まで義務づけられました。これは、植民地支配者の分離政策であり、華人と「現地人」が結託して植民地支配に対抗することを妨げる目的がありました。

また、植民地時代には、華人に対して一定の経済活動の特権が与えられていたので、経済的に彼らは優位になりました。したがって独立後、国民国家インドネシアの中における華人の立場が、経済的にも文化的にも問題となりました。そんな状況の中で、一九六五年まで続いたスカルノ時代には、華人たちの間では、みずからの文化的アイデンティティー(中国の名前、文化、宗教、習慣、言語)を

維持したままでインドネシア社会の一部になるという発想が優勢でした。

少数民族が、名前、文化、宗教、習慣、言語などの文化的アイデンティティーを維持したままである社会の一部になるという発想は、一般的に多元主義 (pluralism) と呼ばれています。

しかし、多元主義の他に同化主義 (assimilation) という考え方もあります。これは、少数民族が、その文化的アイデンティティーをすべてマジョリティーの文化に「同化」させることにより、その社会に融合することを目指す政策です。明治以来、沖縄が歩んだ道は、まさにこの同化政策の典型的な例といえます (Schwarz 1994: 104; cf. Coppel 1983: 44-51)。

一九五〇年代から一九六〇年代半ばまでは、多元主義的発想に基づき、在インドネシア華人が、インドネシア民族に「統合」され、インドネシアに数ある部族 (エスニック・グループ) の一つになることを目指す華人団体が躍進しました。しかし、この団体は、一九六〇年代から当時の左翼勢力に荷担したため、一九六五年の政変後、共産党が非合法化されたのを受けて、解散を余儀なくされました。

その結果、インドネシア政府の華人政策は一転して同化政策のみとなり、三二年間続いたスハルト時代を通じて、華人の名前をインドネシア的な名前に変えることの奨励、印刷物・看板における中国語 (漢字) の使用禁止、さらには獅子舞、ドラゴン・ダンスなど中国的踊りをおおやけの場所で演じることの禁止などの差別的政策が行われました (Schwarz 1994: 130; Winarta 1998)。

そのような差別の裏には、権力者に近い一部の華人財閥が優遇された事実もありましたが、興味深いのは、琉球処分以後の沖縄の知識人が日本への同化を提唱したように、スハルト時代の華人社会のリーダーたちも、同化政策を支持したことです。

にもかかわらず今年五月の暴動が起き、三〇年以上続いた同化政策が、華人問題の抜本的解決をもたらさなかったことが暴露されました。そのため、今インドネシアでは、政府・市民両レベルで華人問題解決・差別撤廃のための真剣な努力が始まっていますが、特に華人の人たちはこれから自分たちのアイデンティティーをいかに定義付けるか、自主的な決断を期待されています。

このように、インドネシアの華人社会の文化的アイデンティティーも歴史的プロセスの中で様々な変遷を経てきた事実は、沖縄の歴史体験に通じるものがあります。また、そのような歴史的プロセスにおける文化の構築は、すべての文化にあてはまることですが、沖縄の実例の特徴は、しばしば単一社会などと言われる日本の中にありながら、多民族社会であるがゆえに起きている東南アジアの様々な問題に共通するような歴史的体験を持っていることです。

結論的に、沖縄文化の基底と普遍性というテーマを、プロセスとしての文化という見方から、考察してみると、私たちが「沖縄文化の基底」だと感じる事柄も、実際は相対的なものであり、それを不変のエッセンス・本質と断じた場合は文化の動態性を見失った「エセンシャルイズム」（本質主義）に陥ってしまうということです。

しかしながら、日本への同化と自立の間で苦渋の道歩んだ沖縄の歴史は、今東南アジアで起きているもろもろの問題に共通する問題提議をもたらし、インドネシアにおける新たな市民社会形成に大きな教訓を与えることは間違いないと思います。これこそ、沖縄の文化的状況の普遍性といえるでしょう。

【参考文献】

Alam, Bachtar

195a 「沖縄の Americanization 再考察：沖縄本島北部一農村におけるキリスト教布教の事例」、思想の科学 (33) 10月号：19-21。

195b Diverging Spirituality : Religious Processes in A Northern Okinawan Village [分岐する精神性：沖縄本島北部一農村における宗教プロセス] . Ph. D. Dissertation, Department of Anthropology, Harvard University, [ハーバード大学人類学科博士論文] .

1998 The Fate of "Culture" : The Construction of Okinawan Culture in Japanese Anthropology [「文化」の運命：日本の人類学における沖縄文化の構築] . Paper presented at the Session on "The Making of Anthropology in Asia : The Past, the Present, and the Future" at The 14th International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences" [第14回国際人類学・民族学会議の分科会「アジアの人類学の創造・過去・現在・未来」にて発表したペーパー] , 29 July 1998, Williamsburg, Virginia, USA

Coppel, Charles A.

- 1983 Indonesian Chinese in Crisis. Kuala Lumpur : Oxford University Press.
Geertz, Clifford
- 1973 The Interpretation of Cultures. New York : Basic Books.
Higa, Shunchoo
- 1964 On Okinawan Surnames. *In* Ryukyuan Names : Monographs on and Lists of Personal and Place Names in the Ryukyus. Edited by Shunchoo Higa. Honolulu : East-West Center Press.
永國麿ニ
- 1998 『ペーシ語』。東京：講談社。
- Schwarz, Adam
- 1994 A Nation in Waiting : Indonesia in the 1990s. Sydney : Allen & Unwin.
Sears, Laurie J.
- 1996 Shadows of Empire : Colonial Discourse and Javanese Tales. Durham : Duke University Press.
Tamanoi, Mariko A.
- 1990 Women's Voices : Their Critique of the Anthropology of Japan. Annual Review of Anthropology 19 : 17-37
Vayda, Andrew P.
- 1994 Actions, Variations and Change : The Emerging Anti-Essentialist View in Anthropology. *In* Assessing Cultural Anthropology. R. Borofsky, ed. pp. 201-311. New York : McGraw-Hill, Inc.
Winarta, Frans H.
- 1998 Undang-Undang Anti Ras, Sebuah Payung Menuju Kehidupan Harmonis [Anti-racism law : an umbrella for the harmonious social life]. Unpublished paper.